

人を生かす言葉

【聖書】 エゼキエル書 2章8節～3章4節

人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞きなさい。あなたは反逆の家のように背いてはならない。口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。」わたしが見ていると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。彼がそれをわたしの前に開くと、表にも裏にも文字が記されていた。それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。

彼はわたしに言われた。「人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい。」わたしが口を開くと、主はこの巻物をわたしに食べさせて、言われた。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。主はわたしに言われた。「人の子よ、イスラエルの家に行き、わたしの言葉を彼らに語りなさい。」

マタイによる福音書 4章1～4節

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」

【序】 聖書を通読する恵み

聖書は、旧約聖書39巻と新約聖書27巻、合計66巻の文書から成り立っています。内村鑑三は聖書研究の著述活動を通して、聖書の信仰を大勢の日本人に紹介した功労者ですが、こう述べています。「聖書66巻を通読してみて、我々は**明白な一事**の印象を得る。それは、**救われる道はイエス・キリストによる以外、天下になし**ということである」。

救い主キリストが来りたもうことを待ち望みつつ、歴史の中で生きた人々の信仰の証を書き記した**旧約聖書**。ナザレのイエスとしてこの世に来て下さった**救い主と出会って救いにあずかった者**の証しと、救い主が新しい天地をもたらして下さる**終末の黙示録**が**新約聖書**です。私たちはとかく新約聖書に偏りがちですが、旧約聖書をも努めて読んで、イエス・キリストを信じる信仰を豊かにしていきたいものです。

私たちは聖書教育のカリキュラムに従って、教会学校で聖書を学んでいますが、今年は5月から11月までの7ヶ月間、旧約聖書を読むことになっています。それによって、イエス・キリストを救い主とする**聖書の信仰**が豊かにされることを期待しています。さて5月のイザヤ書、6月のエレミヤ書に続いて、今月は同じ預言書エゼキエル書です。エゼキエル書も48章ありますから、4回の日曜ではごく限られた部分しか学べません。この機会にご自分で一応通読なさることをお勧めします。

[1] 人はパンだけで生きるものではない

イエス・キリストは、救い主としての働きを開始される前に、荒野で40日間の断食の祈りをされました。その時、悪魔から三つの誘惑を受けました。その第一が「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」。主イエスはお答えになりました。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ福音書4:4)。

私が青年時代に私の牧師から繰り返し聞かされたお話の一つ。明治時代の日本のキリスト教会の指導者の一人植村正久牧師は、徳川幕府の旗本の家の出身でした。靖国神社近くの富士見町教会牧師を長く勤められました。名古屋で特別伝道集会の奉仕をされた時のことです。或る金持から大層立派な食事のもてなしを受けました。先生は出されたご馳走を喜んで全部平らげた後で、「しかし〇〇さん、貴方は毎日このようなご馳走を食べておられるのですか？ 貴方は豚だねー」と言ったそうです。

もてなした挙句に「豚だねー」などと言われたら、普通の人なら腹を立てるところですが、さすがに大きな商売をしている人物です。「先生。それはどういう意味でしょうか？」と静かに質問したそうです。「そうですね。毎日うまい物をたらふく食べて満足しているだけなら、豚と変りないでしょう。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』。神の口から出る一つ一つの言葉に養われてこそ、人間ではないでしょうか」と植村先生はおっしゃったそうです。

その金持は「本当にそうだ」と心を打たれ、それから聖書を読み、教会に通い始めて、立派なクリスチャンになったそうです。「しかし、貴方は豚だねー」。私もご馳走に満腹した時、この声が聞こえてくるような思いになる時があります。人間食べ物がなければ、どんな人でも死んでしまいます。生きていく上で**食べ物は絶対に必要**です。ですから主イエスも「人はパンで生きるものではない」とはおっしゃっていません。「人は**パンで**だけで生きるものではない」とおっしゃったのです。

貧しい人々に食べ物を豊かに与えることで、世界を救うキリストであることを現したらどうかという声。この声は今でも強力に響いてきます。そこらにごろごろしている石を次々とパンに変えて配ったら、主イエスはたちどころに、世界中の人々から「**世界を救う王の王**」として崇められることでしょう。しかし**経済が豊かになれば**、それで人間は皆幸福になるかという、そうではありません。日本でも経済が復興し学校の校舎が新しく立派になったら、生徒が荒れ始め、いじめ、不登校、自殺という深刻な教育問題が起こってきたのでした。**経済的に豊かになるだけでは、私たち人間は幸福にならない**のです。

[2] 言葉かけの大切さ

青年時代に、重い心身の障害児の施設「**島田療育園**」を見学しました。7才から 13才位の子どもたちがベットに寝かされていました。自分で手を使えない。歩けない。しゃべることも出来ない。ただベットの上にごろんと寝かされているだけの子どもたちでした。部屋がシーンと静かで、子どもの部屋とは思えません。

そこへ看護師さんがにぎやかに入ってきて、「〇〇ちゃん さあお散歩しようか」と一人の子をおんぶして、部屋の中を歩き始めました。すると今まで無表情だったその子が**生き活きとした子ども**の顔になりました。「今日は！お元気ですか」と看護師さんが、背中を傾けて、その子の顔を隣のベットの子の顔に近づけて、ご挨拶をさせました。すると二人とも**ニコッと笑う**のです。

看護師さんの話によると、いろいろ話しかけながら、ゆっくりご飯を食べさせて上げるのを、子どもたちが**一番喜ぶ**のだそうです。看護師さんの手記にこうありました。「この子たちでも、食欲だけでは満足しないものを持っている。この子たちが求めているのは、私たちの**言葉かけ**。心のこもった**お相手**なのだ。この子たちは**人間らしく生きるために**、この言葉かけを必要としているのだ」。

札幌の聾学校幼稚部の佐藤先生が『うちの子だって聞こえるよ』という本を出しました。それを読みますと、「同じ両親の許で育っている兄弟でありながら、耳に障害があつて**言葉の聞こえにくい子ども**は、良く聞こえる子よりも知識が少ないばかりか、自分勝手に性格に**ゆがみ**のみられる場合が多い。どうして同じ親に育てられながら、そのように違ってくるのだろうか。大きな原因は、母親がどうせこの子は聞えないからと諦めて、**言葉かけ**をしなくなってしまうからではないか」とありました。

母親は、まだ言葉がよく理解できない赤ん坊に、おしめをかえ、乳を飲ませ、あやしたり、寝かせたりしながら、毎日**何百回**となく話しかけます。「**育児とは、たゆまない我が子とのおしゃべり**」と言われている通りです。赤ん坊は言葉を全く持たないで生まれてきます。しかし何かにつけて**語りかけてくれる母親**からの言葉が、体の中にどんどん注ぎ込まれることによって、やがて一杯になり、溢れ出るようにして、**口から言葉が出る**ようになるのだそうです。

こうして言葉を身につけていながら知識を増やし、言葉で考え、言葉で自分の意志を伝え、言葉で決意して行動を起こすようになっていきます。そこで**言葉が貧弱な人は**、他の人とうまく交われないばかりでなく、思想も貧弱になり、実践力も乏しいと言われるようになっていくのだそうです。札幌聾学校幼稚部の先生は、「耳に障害があつても、耳のよく聞こえる子ども以上に**言葉かけ**をして上げてほしい。そうしたら**豊かな人格**の人に育っていきます」と訴えていました。

[3] 神の口から出る一つ一つの言葉で生きる

主イエスはおっしゃいました。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」。そこでまず、私たち**人間の口から出る言葉**であっても、私たちが人として生きていく上で、言葉がどれほど大きな素晴らしい力をもっているかを、身近な例からお話しました。次に**神さまと私たちとの関係**に於いて、言葉を考えてみることにいたしましょう。

「人は神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」——ここには、神さまは私たちに、**言葉をもって語りかけてくださるお方**だという**信仰**があります。今私たちが守っている礼拝を見てみましょう。賛美歌、祈り、聖書朗読、説教と、どれも**言葉を媒介にした神さまとの交流**で組み立てられています。特

に聖書によって神の言葉が朗読され、その聖書の言葉の説き明かしとしての説教が、礼拝の中心にあります。皆さんは説教を通して、聖書の言葉を深く聞きとり、祈りや賛美歌で応答しつつ、この一週間を生きていこうとしておられます。

宗教によっては、**荘厳な儀式**や**供え物**を捧げることを中心にした信仰とか、護摩をたいてお経を読みつつ祈りをささげる信仰、厳しい**戒律**を守り、**修行**や**善い行い**を積んでいく信仰とかいろいろあります。その中で**キリスト教信仰**は、神さまが私たちにお語りになる**言葉を、聖書から聞きとり、その言葉を食べて、養われ、生きていく信仰**と申せましょう。

これは「**神は愛の神さまだ**」という**信仰**に基づいているからにはほかなりません。**真実の愛**は、愛する相手の自由・自主性をどこまでも尊重します。自分の思いを一方的に相手に強制し、自分の思い通りに相手を動かそうとする愛は、相手を**真実に愛している愛**ではありません。**言葉で愛を伝え、言葉で愛の絆を結び、愛を育てていく**——ここに**真実の愛**があるのではないのでしょうか。

神さまは、聖書の言葉に基づく私の説教を通して、今皆さん方お一人お一人に**語りかけておられます**。しかし皆さんはその語りかけを聞かない自由をお持ちです。また聞いても、それに応答しない自由をお持ちです。会社ではそうはいかないでしょう。上司の指示はしっかり聞かなければなりません。そして言われたことは必ず実行して、結果を出さねばなりません。

しかし神さまは、私たちが**真実に愛して下さって**おられるので、私たちの**自主性を尊重し**、聞く・聞かない自由、応答する・しない自由という**全き自由**の中に私たちを置いて下さり、たとえご自分の期待とは違う行動をとったとしても、それなら勝手にしろと見限らず、変らない愛を持って、更に**語りかけ続けて下さる**のです。私たちを**在るがままの私**として受け入れて、愛して下さっているからです。そして私たちに**正しい命の道**を歩ませようと、語り続ける神さま。このように**言葉をもって私たちと結びつこうとして**おられる神さまこそ、**真の愛の神さま**ではないのでしょうか。

その愛の神さまが私たちに語りかけてくださる言葉こそ、私たちに**真実の道、命の道**を歩ませて下さる言葉です。パンだけで生きるのなら、他の生き物と同じです。神さまのお姿に似る者として造られ、この世界の管理を委ねられた人間として生きようとするのならば、神さまの口から出る一つ一つの言葉を聞いて生きていかなければなりません。

[結] 神の言葉を食べて生きる

預言者**エレミヤ**が40年間にわたり、神の民に下される神の裁き、エルサレムの破壊、南王国の滅亡を預言し続けましたが、神の民は王をはじめ皆、聞きいれて**悔い改め**ませんでした。そして**紀元前 597 年**に、ヨヤキン王以下重立った人々が捕虜となってバビロン王国へ引き立てられて行きました。**第一次捕囚**です。その後王にされた**ゼデキヤ王**も、バビロンに反旗をひるがえして11年目の**紀元前 587 年**に殺され、都のエルサレムは破壊され、王国は滅亡したのです。

エゼキエルはエルサレムの神殿に仕える祭司でしたが、第一次捕囚の一人として、バビロンへ連れて行かれました。そして5年目の年に、バビロンのケバル川のほとりで祈っている時、神さまから預言者として召されました。エゼキエル書 1～2 章に記されています。

神さまはエゼキエルにお語りになりました。「人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞きなさい。あなたは反逆の家のように背いてはならない。口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい」。エゼキエルの前に巻物が差し伸べられました。その巻物には、表にも裏にも哀歌と、呻きと、嘆きの言葉が記されていました。「人の子よ、この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい。」

エゼキエルは口を開き、命じられるままに巻物を食べました。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ」。彼がそれを食べると、それは蜜のように口に甘くなりました。主は言われました。「人の子よ、イスラエルの家に行き、わたしの言葉を彼らに語りなさい。」

巻物とは、神の言葉が書き記されている巻物です。その神の言葉が、哀歌(悲しい言葉)と、呻きと嘆きの言葉だというのは、その神の言葉を聞いた者を、大きな悲しみと呻きと嘆きに溢れさせる厳しい言葉だという意味でしょう。しかし、聞く者をそのように苦しめる神の言葉を、残さずに全部胃袋に入れて腹を満たすと、不思議なことに蜜のように甘くなったのです。これは神さまの言葉を聞いて、悲しみ、呻き嘆いて悔い改めるならば、甘い蜜のような救いの喜びをいただけるということでしょう。

こうしてエゼキエルは、祖国を失い、敵地で生きる同胞たちを、神の言葉を聞いて悔い改めさせ、蜜のしたたる人生へと導く預言者に召されたのでした。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る言葉によって生きる」。これは神さまがモーセに語られた言葉です(申命記8:3)。神さまはその言葉を 800 年後の国が滅びるという危機のなかでエゼキエルを通して示されたのです。そして更に 600 年後にイエス・キリストを通して私たちに語りかけて下さいました。

人はパンだけで生きるものではありません。神さまの口から出る一つ一つの言葉を聞くことによって、生かされていくのです。私たちはこの大切な言葉を、今日新たな思いで聞きとりましょう。そして聖書を通して語りかける神さまの言葉を、しっかりと聞き、その命の言葉を食べて胃袋を満たし、今日を生きて参りましょう。

完